日本・韓国・ベトナムにおける幸福度の比較
── ソーシャル・ウェルビーイング研究の現場から（1）──

金井　雅之†

Happiness in Japan, South Korea, and Vietnam:
Findings of Social Well-being Studies (1)

Masayuki Kanai

Abstract：専修大学ソーシャル・ウェルビーイング研究センターが実施している「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」のうち，日本・韓国・ベトナムのデータから得られた知見の一部を紹介する．各国の幸福度（ウェルビーイング）の分布と規定要因を比較する．幸福度を測るための3つの尺度，すなわち主観的幸福度，全般的生活満足度，カントリルの人生の階梯尺度ごとの，回答分布や諸属性との関連の仕方の異同にも留意する．主な知見は以下の3点である．(1) 幸福度の分布やその規定要因は，日本と韓国とは類似性が高いが，ベトナムはやや異質である．(2) すべての国において，幸福度の3つの尺度のうち，主観的幸福度，生活満足度，カントリル尺度の順で，平均幸福度が低くなる．(3) すべての国において，今回幸福度の規定要因として検討した性別，年齢，婚姻状態，学歴，従業上の地位，世帯所得のいずれにおいても，幸福度の尺度による関連性の違いは見られない．
Keywords：ウェルビーイング，幸福度尺度，アジア

1　はじめに

1.1 「アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの構築」

専修大学ソーシャル・ウェルビーイング研究センターがおこなっている「アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの構築」という研究プロジェクトは，文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として，2014年度から2018年度までの5年計画で実施されているものです．

この研究プロジェクトの目的は，(1) 東アジアおよび東南アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイングの現状と規定要因を，調査票（アンケート）による国際比較調査を行うことによって明らかにすることと，(2) この地域の大学や研究機関からなる

†　専修大学ソーシャル・ウェルビーイング研究センター研究員　mkanai@senshu-u.jp
［受付日］2016年12月20日　　［受理日］2016年12月21日

国際的な研究コンソーシアムを構築し，ソーシャル・ウェルビーイングや関連するテーマを将来にわたって協働的に研究していくための基礎を築くことです．2016 年 12 月現在，日本・韓国・中国・ベトナム・フィリピン・タイ・インドネシアの 7 ヶ国の大学や研究機関がコンソーシアムに参加し，ソーシャル・ウェルビーイングにかんする共同研究をおこなっています．

1.2 「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」

この研究プロジェクトのもっとも重要な研究活動は，コンソーシアム参加国での，ソーシャル・ウェルビーイングにかんする，一般の人びとを対象にしたアンケート調査，すなわち「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」の実施です．

この調査は，2014 年度に日本でおこなわれたのを皮切りに，2015 年度は韓国とベトナムで実施され，2016 年度はフィリピンとタイで実施されています．さらに 2017 年度には，中国とインドネシアでも実施される予定です．調査票は，全部でおよそ 60 問の質問から構成されています．これらの質問は，大きく分けて，(1) ソーシャル・ウェルビーイング，(2) 社会関係資本，(3) リスクと社会的安全網，(4) 基本属性の 4 つに分類されます．

この論文では，(1) のソーシャル・ウェルビーイング関連質問のうち，ウェルビーイングを測定するための 3 つの質問を中心に，どのようなことが明らかになったのかを紹介していきます．2015 年度までに調査が完了している日本・韓国・ベトナムの 3 ヶ国のデータを用いて，お互いの比較をしていきます．

2　ウェルビーイング研究と幸福度の尺度

2.1　ウェルビーイングとソーシャル・ウェルビーイング

ウェルビーイング (well-being) という言葉は，良く (well) 存在していること (being) という意味であり，哲学や社会科学で広く使われます．古代ギリシャの哲学者アリストテレスは『ニコマコス倫理学』の中で，ポリス的動物としての私たち人間の行為が最終的に目指しているもの（＝善）は「幸福（eudaimonia)」であり，それは「よい人生を送ること（eu zen)」や「立派にやっていくこと（eu prattein)」と同じ意味であると述べています（Bywater 1894=2015: 34)．このように，ウェルビーイングと幸福とは概念的にとても近い関係にあるため，近代以降の社会科学でも，多くの場合この 2 つは同じ意味で用いられてきました．ウェルビーイングすなわち幸福の程度のことを，幸福度（happiness）と言います．

ちなみに，本研究プロジェクトでは，ウェルビーイングという概念を発展させて，「ソーシャル・ウェルビーイング」というコンセプトを提唱しています．アリストテレスの思想に見られるように，人間は社会を形成し，他の人間と共にしか生きていけない存在です．よって，個人が幸福であるかどうかは，それぞれの個人の中だけで決

まるのではなく，社会の他の人びととの関係性や，社会それ自体のあり方に強く影響を受けます．したがって，個々人のウェルビーイングの状態を研究するためには，その個人が属する社会全体のあり方を包括的に検証しなければならないのです．

2.2 「社会のウェルビーイング」を論じる際の留意点

幸福度を具体的にどうやって測るのかという問題に入る前に，もう１つ気をつけなければならないことがあります．それは，「社会のウェルビーイング」という概念をどのように考えるべきか，ということです．

幸福であるかどうかは，第一義的には個人を主語として語られるべき問題です．したがって，「私はいまとても幸せだ」とか「彼女はかつて幸せだった」という言い方には特に問題はありませんが，たとえば「ブータンは日本よりも幸せだ」といった言い方には注意が必要です．「ブータン」や「日本」という感覚や評価の主体が存在して，自分（＝社会）のことを幸せとか幸せでないとかと，文字通り判断しているわけではないからです．

しかし，ある社会に属するたくさんの人びとの，自分の幸せさに対する自己評価の値（幸福度）の，集団全体での分布からえられる情報（たとえば平均）をもとに，その社会に属する人びとの全体的な幸せさについて議論すること自体は，無意味ではありません．たとえば「ブータンの人びとの平均幸福度は日本の人びとの平均幸福度よりも高い」という表現には，論理的におかしな点はありません．また，社会全体での平均幸福度をなるべく高くするように努力することは，個々人の幸福度が上がれば社会全体での平均幸福度も上がるという数量的関係が成り立つ場合は，実践的・政策的にも意義のあることです．

以上より，「社会のウェルビーイング」を，その社会に属する個々人のウェルビーイングの値の分布から定義した上で（たとえば平均幸福度），ある社会と別の社会とでそれらを比較したり，ある社会の異なる時代でのそれらを比較したりすることには，一定の意味はあります．実際，現代の社会科学においては，こうした社会指標（social indicator）を扱う研究がたくさん存在しますし（山内 2014；白石・白石 2016 など），経済協力開発機構（OECD）などの国際機関でも，「社会のウェルビーイング」をより精緻に定義し測定していこうとする試みがおこなわれています（Commission on the Measurement of Economic et al. 2010; Organisation for Economic and Development 2011; Zanden 2014 など）．

しかしながら，「社会のウェルビーイング」の相対的大小のみに注目するだけでは，ソーシャル・ウェルビーイングの全体像を把握し，実践に役立つ知識を社会に提供することはできない，と著者は考えています．「社会のウェルビーイング」のもととなる個々人のウェルビーイングが，どういうときに上がったり下がったりするのかの因果メカニズムを１つ１つ具体的に突き止めていかなければ，個々人のウェルビーイン

グを底上げするために何をすれば効果的かを知ることはできないからです.

そこでこの論文では,「社会のウェルビーイング」だけではなく,個人のウェルビーイングがどういうときに上がったり下がったりするのかも検討していきます.

2.3　幸福度の3つの尺度

さて,個人の幸福度を,アンケート調査でどうやって測るのか,という問題に戻りましょう.

「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」では,幸福度をつぎの3つの質問で測定しました.すなわち,主観的幸福度,全般的生活満足度,カントリルの人生の階梯尺度です.

第一の「主観的幸福度(subjective happiness)」とは,回答者が現時点で自分をどの程度幸せだと感じているかを,極力シンプルに測る質問です.具体的には,「現在,あなたはどの程度幸せですか」という質問文に対して,0(「とても不幸」)から10(「とても幸せ」)までの11段階の数値のうち,どれか1つを選んでもらいました.

この質問の特徴は,どういう状態を幸せと考えるかは,回答者の考え方に任せているところです.幸せの定義は人それぞれであり,調査者の側がその多様性を事前に予測して質問文に盛り込むことは事実上不可能なので,いっそのことその部分はブラックボックスにしようという考え方です.国際比較可能な調査としては,米国を中心に世界各国でおこなわれている総合的社会調査(General Social Surveys)などが,この尺度を採用しています.

第二の「全般的生活満足度(overall life satisfaction)」とは,現在の生活にどれくらい満足もしくは不満かを,たとえば仕事や家計や結婚生活といった具体的な生活領域を特定せずに,包括的に評価してもらうものです.「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」では,「あなたは現在,次のことにどれくらい満足していますか」という設問の中の一項目として「現在の生活全般」を設け,0(「とても不満」)から10(「とても満足」)までの11段階で答えてもらいました.

生活に満足しているかどうかと幸せかどうかは,概念的に別のことを訊いているように見えるかもしれません.しかし,ウェルビーイングをめぐるこれまでの研究では,この2つの質問は事実上同じことを測定している(つまり互換的に使用できる)という考え方が主流でした(Frey and Stutzer 2002; Frey et al. 2008).もっとも,最近ではこの2つを同じものと扱うのは適切ではないという研究も出てきていますので,注意が必要です(Graham 2011;小林・ホメリヒ 2014).国際的に比較可能な調査としては,世界価値観調査(World Values Survey)などが,生活満足度を測定しています.

幸福度の第三の尺度である「カントリルの人生の階梯尺度(Cantril's Ladder of life scale)」は,心理学者ハッドリー・カントリルが考案したものです(Cantril 1965).

米国に本社をおく世論調査会社ギャラップ社が世界各国でおこなっている，ギャラップ世界調査（Gallup World Poll）に採用されたことで有名になりました．ギャラップ世界調査での質問文は大変長いのですが，「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」では少し省略して，つぎのような質問文にしています．選択肢はやはり0（「最低の人生」）から10（「最高の人生」）までの11段階です．

> 0から10までの数字の書かれた段のある階段を想像してみてください．最上段はあなたが考えられる最高の人生，最下段はあなたが考えられる最低の人生だとします．高い段にいるほど自分の人生をよいと感じ，低い段にいるほど自分の人生を悪いと感じるとしたときに，現時点では，あなたはこの階段の何段目にいると感じますか．あなたが最も近いと感じる段の数字を1つ選んでください．

この設問は，回答者がこれまでの自分の人生を振り返って，じっくりと判断することを要求しています．単に現時点での瞬間的な感情（主観的幸福度）や，現在の生活状況への評価（全般的生活満足度）をたずねているだけではないという点で，アリストテレスの考えた幸福という概念により近いものと言えるかもしれません．

以上のように，幸福度の測り方にはさまざまなものがあります．ところが，これまでのアンケート調査の問題点は，1つの調査の中でこれらの尺度のうちの1つ，もしくはせいぜい2つしか訊ねられていなかったことでした．もし尺度によって回答の分布や，さまざまな個人属性等との関連の仕方が異なるとしたら，ある尺度を使って導き出した分析結果が，別の尺度を使って分析すると消えてしまうかもしれません．

この疑問に答えるために，「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」では，あえてこれら3つの尺度をすべて盛り込み，尺度による違いを精密に分析できるように設計しています．そこで以下では，測り方によってウェルビーイングの分布や因果メカニズムに違いが見られるのかどうかに注目しながら，日本・韓国・ベトナムにおける人びとのウェルビーイングの状況を確認していきます．

3　調査の概要

まず，今回データを使う，日本・韓国・ベトナムの3ヶ国での調査の概要を確認しておきましょう（表1）．

これら3ヶ国の調査は，いずれも2015年におこなわれました．日本と韓国では，ウェブ調査，すなわちインターネット上のホームページで回答を入力してもらう方法でおこないました．調査は専門の社会調査会社に委託し，回答者は，それぞれの会社にあらかじめ登録している全国のモニタの中から，性別・年代・居住地域（日本ではこれに加えて市町村の人口規模）別の構成が，最新の国勢調査データに基づくそれぞれの国全体の実際の人口構成と同じになるように，コンピュータで無作為に選んでもらい

表１「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」の概要

	日本	韓国	ベトナム
研究機関	専修大学	ソウル国立大学	ベトナム社会科学院
実施時期	2015 年 2 月	2015 年夏	2015 年夏
実施方法	ウェブ調査	ウェブ調査	訪問面接調査
標本抽出方法	委託先調査会社の登録モニタから，性別・年代・地域・都市度が国勢調査人口に比例するように割当．20 歳～ 69 歳.	委託先調査会社の登録モニタから，性別・年代・地域が国勢調査人口に比例するように割当．20 歳～ 69 歳.	北部・中部・南部から，都市部と村落部の地区をそれぞれ 1 つずつ無作為に選び，それぞれの地区から 200 人の住民を無作為に選ぶ．18 歳～ 74 歳.
標本サイズ	11,804	2,000	1,200

ました．このような割当をおこなうのは，調査対象者の属性がその国の社会全体の人びとの属性と著しくずれてしまうと，調査から得られた知見を社会全体に一般化するのがむずかしくなるからです. とはいえ, ウェブ調査に回答できる人は普段コンピュータを使う人に限られますから，オフィスで働いている人や学歴の高い人にどうしても偏りがちになることが知られています．よって, 日本と韓国のデータを見るときには, 注意が必要です.

一方ベトナムでは，インターネットを使う人自体が日本や韓国と比べてまだまだ少ないので，ウェブ調査は現実的ではありません．そこで，伝統的な社会調査の方法である, 訪問面接方式でおこないました．これは, 調査員が対象者のお宅を直接訪れて, 玄関先などで対象者に一問一答形式で質問に答えてもらい，調査員が回答を記録するやり方です．調査地点は, 本来なるべく全国各地に散らばることが望ましいのですが, 今回は予算等の制約により，北部・中部・南部からそれぞれ都市部と村落部の集落を 1 つずつ無作為に選び，それぞれの地区から 200 人ずつの対象者を，これも無作為に選びました.

最終的に回答を得られた人の数は，日本では 11,804 人，韓国では 2,000 人，ベトナムでは 1,200 人でした.

4　幸福度の分布

4.1　幸福度の平均

では，いよいよこの 3 ヶ国における人びとのウェルビーイングの状況を確認していきましょう.

最初に，先に説明した「社会のウェルビーイング」，すなわち幸福度の社会全体での平均を見てみます．日本・韓国・ベトナムにおける，主観的幸福度，全般的生活満足度，カントリルの人生の階梯尺度への，0 から 10 までの回答の平均値をまとめたのが表 2 です.

表２　３ヶ国における平均幸福度

	日本	韓国	ベトナム
主観的幸福度	6.25	5.93	7.63
全般的生活満足度	5.87	5.70	7.37
カントリルの人生の階梯尺度	5.65	5.54	7.02

まず，幸福度の３つの尺度のそれぞれの平均値を国別に，つまり横方向に比較してみましょう．３つの尺度のすべてにおいて，ベトナムがもっとも高く，日本が真ん中，韓国がもっとも低いというパターンが見てとれます．これは，世界価値観調査などの知見とも一致しています．もっとも，先に説明したように「社会のウェルビーイング」を安易に比較することには慎重であるべきです．

つぎに，それぞれの国の中で３つの尺度の平均値を今度は縦方向に比較すると，同様にすべての国で一貫した傾向が見て取れます．すなわち，主観的幸福度で測ったときの平均値がもっとも高く，生活満足度，カントリル尺度の順に低くなっていくという傾向です．

同じ調査において同一条件で測定したときに，これらの３つの尺度の平均値がどのような傾向で現れるかは，測定の方法の研究においては興味深い問題です．今後このプロジェクトでおこなわれる他の国の調査データが加わったときにどうなるかを，検証していきたいと思います．

4.2　幸福度の分布

つぎに，平均を計算する前の幸福度得点の全体的な分布を，もう少し丁寧に見ていきましょう．

まず，日本における幸福度得点の分布を示したのが図１です．0（とても不幸）から 10（とても幸せ）までの 11 個の選択肢のそれぞれを選んだ人の人数を，回答者全

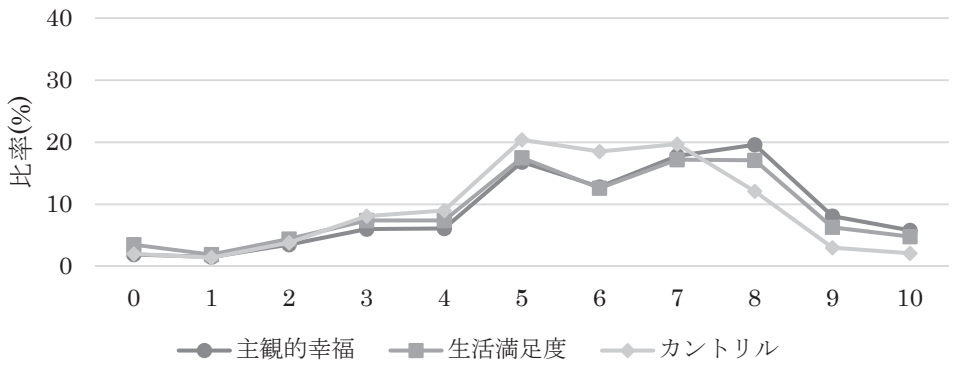

図１　日本における幸福度の分布

員の人数で割り，パーセントで示しました．

主観的幸福の分布では 8 を選ぶ人がもっとも多く（19.6%），7 がそれに続きます（17.8%）．全般的生活満足度もおおむね似たような分布になっていて，5, 7, 8 がほぼ同じくらい（約 17% ずつ）の高さになります．これに対して，カントリルの人生の階梯尺度だけはやや異なる分布をしており，5 ～ 7 あたりにピークがあります（18.5% ～ 20.4%）．前項で確認した平均値ほど単純なわけではないことがわかると思います．

つぎに，韓国における幸福度の分布を見てみましょう（図 2）．こちらは日本と違って，分布の形状において，主観的幸福，生活満足度，カントリル尺度の違いがあまりありません．また，分布全体の印象も日本と違ってでこぼこが少なく，きれいな山形の分布になっています．

最後に，ベトナムの幸福度の分布を図 3 で確認してみましょう．ベトナムの場合は，先ほど確認したように，平均幸福度が韓国や日本に比べて高いのですが，分布の形状を見ても 4 以下（幸福か不幸かで言えば不幸）を選ぶ人がほとんどいないことがわかります．分布のピークはいずれの尺度でも 8 にあり，特に生活満足度では 32.4%，す

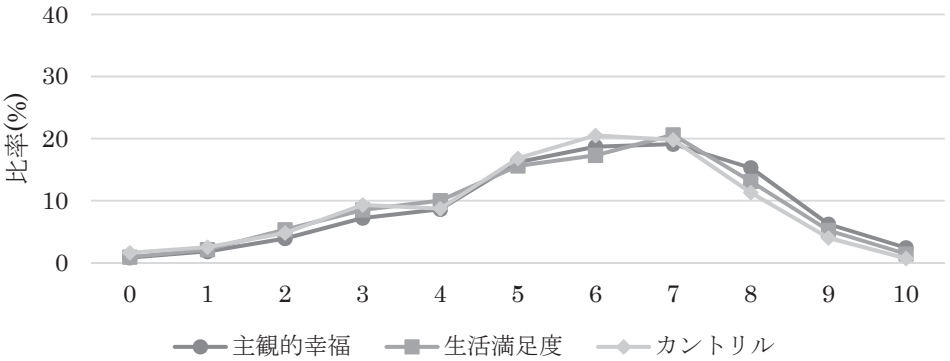

図 2　韓国における幸福度の分布

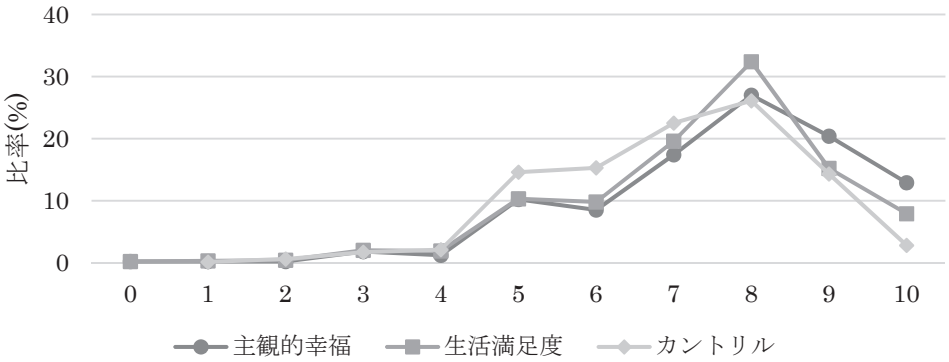

図 3　ベトナムにおける幸福度の分布

なわち実に３人に１人がこの値を選択しています.

このように，ベトナムにおいて値の分布が特定の範囲に偏っているということは，多くの人びとが同じくらいの幸福度を感じているということでもあります．逆に言うと，日本や韓国では，幸せだと思っている人と不幸せだと思っている人のばらつき，あるいは格差が大きいと言うこともできます.

表３　３ヶ国における幸福度の変動係数

	日本	韓国	ベトナム
主観的幸福度	0.36	0.35	0.23
全般的生活満足度	0.41	0.37	0.23
カントリルの人生の階梯尺度	0.36	0.37	0.22

このことを確認するために，分布のばらつきの程度を表す指標のひとつである変動係数の大きさを，表３に示しました．変動係数とは，標準偏差という量を平均で割ったものであり，値が大きいほどばらつき，すなわち格差が大きいことを意味します．標準偏差自体もばらつきの程度を表す指標なのですが，平均が大きくなると標準偏差も大きくなる傾向があるので，その影響を調整したものです.

幸福度尺度ごとに若干のでこぼこはありますが，日本と韓国は変動係数が大きめなのに対して，ベトナムではそれが小さいことがわかります．今後中国や他の東南アジア諸国のデータが加わったときにどのような傾向が見られるかに，注目していきたいと思います.

5　幸福度の規定要因

5.1　それぞれの社会における属性の分布

２節では，個人もしくは社会のウェルビーイングを向上させるためには，個人のウェルビーイングを高めたり低めたりする原因を突き止めなければならない，と述べました．そこで本節では，個人のさまざまな属性が，そうした属性を共有する人たちの平均的な幸福度にどのような影響を与えるのかを，詳しく見ていきたいと思います.

この論文で検討する属性は，性別や年齢のように自分の意志では変えられない狭義の属性だけでなく，婚姻上の地位（結婚しているかどうか）や学歴（どの段階の学校まで通ったか），従業上の地位（どのような働き方をしているか），所得のような，通常社会経済的地位と呼ばれるものも含みます．たとえば所得であれば，もし所得が高い人ほど幸福度が高まる傾向があることが確認できれば，人びとの幸福度を上げるためには人びとの所得を向上させる政策を実施することが有効だろう，という提言につなげることができます.

今回検討する代表的な属性は，表４に示した６つのものです.

表 4　3 ヶ国の回答者の属性分布（%）

	日本	韓国	ベトナム
性別			
女性	50	49	51
男性	50	51	49
年齢			
20 代以下	16	15	33
30 代	22	22	23
40 代	20	26	20
50 代	20	23	14
60 代以上	22	14	10
婚姻上の地位			
未婚	32	32	27
既婚	62	64	70
離死別	6	4	2
学歴			
中卒相当	1	1	43
高卒相当	34	19	29
大卒相当	65	80	27
従業上の地位			
正規雇用	41	48	14
非正規雇用	20	11	27
自営	9	17	52
無職	30	24	7
世帯所得			
第 1 四分位	30	32	22
第 2 四分位	25	27	35
第 3 四分位	22	18	43
第 4 四分位	33	24	——

学歴は，学校教育制度が国ごとに異なりますので，具体的な教育年数はまちまちになりますが，義務教育修了段階を中卒相当，中等教育修了段階（専門学校を含む）を高卒相当，高等教育（短期大学を含む）に進学した場合を大卒相当と分類しました．世帯所得は，自分だけでなく，生計をともにする家族の所得の合計のことです．それぞれの国ごとに回答者を世帯所得の低い順に並べたときに，下から数えて 1/4（25%）の人数を越える最初の金額以下の所得の人を第 1 四分位，1/2（50%）を越える最初の金額までの人を第 2 四分位，というように，全体を 4 つのグループに分けました．ただし，ベトナムだけは第 4 四分位に相当する人が極端に少なかったため，第 3 四分位までとしました．

表 4 を見ていると，それぞれの社会の特徴がよく出ていて，興味深く感じる方が多いのではないでしょうか．ここでは紙幅の関係で詳しく論じることはできませんが，こうしたデータからそれぞれの社会の姿やそこに生きる人びとの人生のあり方がイメージできるようになると，社会科学を学ぶことが楽しくなると思います．

5.2　属性による幸福度の違い

では，以上の６つの属性による幸福度の違いを，国ごとに見ていきましょう．

まずは，日本の状況です（図４）．グラフの読み方は，横軸は左から，性別，年齢，婚姻上の地位，学歴，従業上の地位，世帯所得を表しています．縦軸はそれぞれのグループごとの幸福度の平均を表しており，主観的幸福度，全般的生活満足度，カントリルの人生の階梯尺度の３つの尺度を，マーカーの異なる折れ線で表示しています．

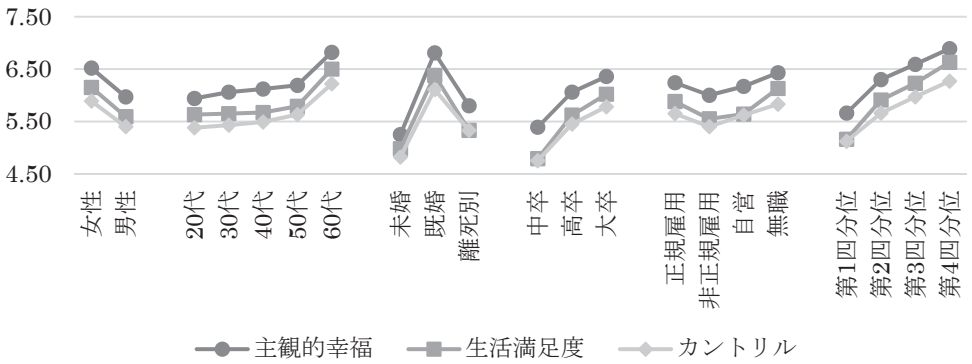

図４　日本における属性ごとの幸福度の違い

幸福度が高い傾向があるのは，男性よりも女性，高齢の人，結婚している人（既婚），学歴の高い人，そして所得の高い人です．非正規雇用（パート，アルバイト，派遣など）の人は，無職や正規雇用や自営の人に比べて，幸福度がやや低めです．

そしてもうひとつ注目したいのが，幸福度の３つの尺度の関係です．前節で確認したように，全体平均は主観的幸福，生活満足度，カントリルの順で下がっていきましたが，属性ごとの違いの傾向は，これらの３つの尺度でほぼ一貫しています．つまり，３本の折れ線は，単に上下に平行移動しただけに見えます．このことは，日本のデータにおいては，少なくともここで検討した６つの属性については，幸福度の規定要因を探る際に，３つの尺度のどれを使うかどうかをあまり気にする必要はない，ということを意味します．

つぎに，韓国のデータを見てみましょう（図５）．

属性ごとの傾向は，日本とほぼ同じです．幸福度が高いのは，女性，高齢の人，既婚者，学歴の高い人，そして世帯所得の高い人です．日本と若干傾向が異なるのは，正規雇用の人がそれ以外の人と比べて幸福度が高いことですが，統計的にみて重大な違いとまでは言えません．

３つの尺度の関係も，日本と同様，規定要因の傾向に大きな影響を与えていません．強いて言えば，中卒の幸福度がカントリル尺度で特に大きく落ち込んでいるように見えますが，韓国データではもともと中卒はたった 1% しかいませんので，これも重大

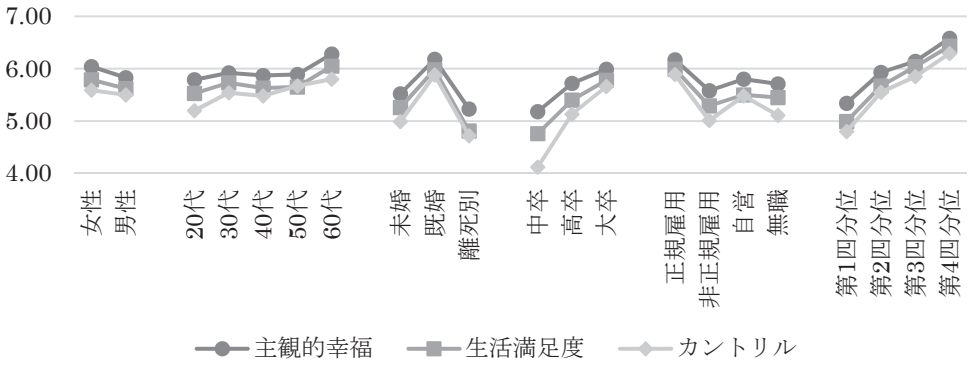

図5　韓国における属性ごとの幸福度の違い

な違いではありません．

最後に，ベトナムのデータを確かめてみましょう（図6）．

ベトナムの場合は，興味深いことに，日本や韓国とはだいぶ傾向が違います．たとえば，日本や韓国とは逆に，女性よりも男性の方が幸福度が若干高く，年齢が高くなるほど幸福度が若干低くなります．未婚者の幸福度が日本や韓国ほどは低くなく，無職の人が仕事をしている人に比べて幸福度が低くなっています．さらに，学歴や所得が，日本や韓国ほど幸福度に強い影響を与えていない点も注目に値します．なぜこうした傾向が観察されるのかについて，今後詳しい分析や研究を進めていく必要があります．

なお，幸福度の尺度の影響については，日本や韓国と同様に，大きな傾向の差は見られません．よって，今回検討した基本的な属性にかんする限り，尺度の違いを気にする必要はあまりなさそうであることがわかりました．

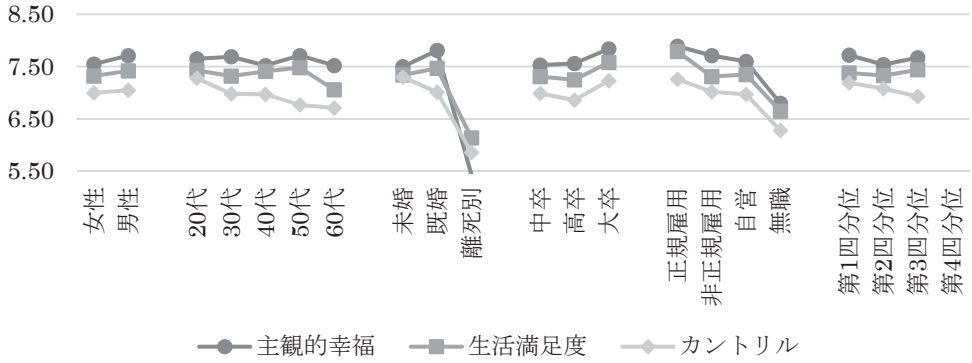

図6　ベトナムにおける属性ごとの幸福度の違い

6　結論と今後の研究の見通し

連載「ソーシャル・ウェルビーイング研究の現場から」の初回のこの論文では，専修大学ソーシャル・ウェルビーイング研究センターが海外の提携研究機関と協力しておこなっている「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」のうち日本･韓国･ベトナムのデータを用いて，これらの社会におけるウェルビーイング，すなわち幸福度の分布と，その規定要因を紹介してきました．特に，幸福度を測定するための３つの尺度について，学術的背景を説明し，尺度に気を使うことの重要性を論じました．

幸福度の分布の国による違い，つまり「社会のウェルビーイング」については，今回用いた３ヶ国のデータのみから性急に何かを論じようとすることは，慎むべきでしょう．

学術的・実践的により重要なのは，個人のウェルビーイングに影響を与えるさまざまな要因を詳しく検討していくことです．この論文では，幸福度とそれぞれの属性との１対１の関連のみを検討しましたが，より厳密には，複数の属性を組み合わせたときに，それぞれの属性が幸福度にどういう影響を与えるかを分析する必要があります（多変量解析）．

また，今回検討した属性は基本的かつ個人的なものが多かったですが，ソーシャル・ウェルビーイングという観点に立つならば，個人を取り巻くさまざまな社会関係が幸福度に与える影響も，明示的に検討していく必要があります．さいわい「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」では，これらに関係するソーシャル・キャピタルや社会的安全網といったことがらも，詳しく訊ねています．本センター員による日本調査データを使った研究成果は，すでに国内外で多数公表されていますが（本号に掲載されている研究成果一覧を参照），今後韓国・ベトナムやその他の国々のデータが利用可能になるにつれて，比較を含めたより一般的な研究成果が産出されることが期待されます．

〔謝辞〕

本研究は平成 26 ～ 30 年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 S1491003 の助成を受けたものです．「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」は，アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの協力を得て，専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル･ウェルビーイング研究センター（研究代表･原田博夫経済学部教授）が設計･実施したものです．

〔文献〕

Bywater, Ingram. ed., 1894, *Aristotelis Ethica Nicomachea*, Oxford: Clarendon Press.（= 2015, 渡辺邦夫・立花幸司訳『ニコマコス倫理学（上）』光文社.）

Cantril, Hadley, 1965, *The Pattern of Human Concerns*, New Brunswick, N.J.: Rutgers

University Press.
Commission on the Measurement of Economic, Performance, Progress Social, Joseph E. Stiglitz, Amartya Kumar Sen, Jean Paul Fitoussi, and Nicolas Sarkozy, 2010, *Mismeasuring Our Lives: Why GDP Doesn't Add Up: The Report by the Commission on the Measurement of Economic Performance and Social Progress*, New York: New Press.（= 2012，福島清彦訳『暮らしの質を測る――経済成長率を超える幸福度指標の提案』金融財政事情研究会.）
Frey, Bruno S. and Alois Stutzer, 2002, *Happiness and Economics: How the Economy and Institutions Affect Well-being*, Princeton, N.J.: Princeton University Press.（= 2005，沢崎冬日訳『幸福の政治経済学――人々の幸せを促進するものは何か』ダイヤモンド社.）
Frey, Bruno S., Alois Stutzer, Matthias Benz, Stephan Meier, Simon Luechinger, and Christine Benesch, 2008, *Happiness: A Revolution in Economics*, Cambridge, Mass.: MIT Press.（= 2012，白石小百合訳『幸福度をはかる経済学』NTT 出版.）
Graham, Carol, 2011, *The Pursuit of Happiness: An Economy of Well-being*, Washington, D.C.: Brookings Institution Press.（= 2013，多田洋介訳『幸福の経済学――人々を豊かにするものは何か』日本経済新聞出版社.）
小林盾・カローラ ホメリヒ，2014,「生活に満足している人は幸福か――SSP-W2013-2nd 調査データの分析」『成蹊大学文学部紀要』229-237.
Organisation for Economic, Co-operation and Development, 2011, *How's Life? : Measuring Well-being*, Paris: OECD.（= 2012, 徳永優子・来田誠一郎・西村美由起・矢倉美登里訳『OECD 幸福度白書――より良い暮らし指標――生活向上と社会進歩の国際比較』明石書店.）
白石小百合・白石賢，2016,「幸福の経済学――現状と課題から次のステップへ」『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』2: 35-53.
山内直人，2014,「福度指標の政策的意義と活用（『幸福度』再考）」『計画行政』37: 11-16.
Zanden, J. L. van, 2014, *How Was Life? : Global Well-being since 1820*, Paris: OECD.（= 2016, 徳永優子訳『幸福の世界経済史――1820 年以降，私たちの暮らしと社会はどのような進歩を遂げてきたのか』明石書店.）

Happiness in Japan, South Korea, and Vietnam:
Findings of Social Well-being Studies (1)

Masayuki Kanai
Senshu University
mkanai@senshu-u.jp

This article introduces some findings of the "International Comparative Surveys on Lifestyle and Values" which were conducted by the Center for Social Well-being Studies at Senshu University in Japan, South Korea, and Vietnam in 2015. The findings include the comparative analyses on the distributions and causal mechanisms of well-being or happiness in these three countries. Three measures of well-being established in the literature, i.e., subjective happiness, overall life satisfaction, and Cantril's ladder of life scale, are compared with each other to examine whether these scales derive different findings on the distribution and causal mechanisms of well-being. Main discoveries are the following. (1) Japan and South Korea share similar characteristics in the distribution and causal mechanism of well-being, whereas Vietnam has different features. (2) The average score of well-being is the highest in subjective well-being, middle in life satisfaction, and the lowest in Cantril's ladder in all of the three countries. (3) No differences in the causal mechanisms of well-being were discovered between subjective happiness, life satisfaction, and Cantril's ladder in all countries, regarding such causal factors as gender, age, marital status, education, employment status, and household income.

Key words: well-being, measures of happiness, Asia